音読劇で読む力を育てる指導の工夫
―『お手紙』の実践を通して―

群馬県邑楽郡千代田町立東小学校　神林　美紀

一　はじめに

低学年の子どもは、音読が大好きである。ひらがなやカタカナが読めるようになったことを喜び、文字を読むことそのものを楽しむ。クラスの友達と一緒に、または一人でも、大きな声で一生懸命音読に取り組める。

この子どもたちが大好きな音読を、物語を読む学習に取り入れたいと考えた。文章をすらすら読み進めるための音読ではなく、物語を読み深めるための思考を伴う音読である。

しかし低学年の子どもたちにとって、音声言語だけで登場人物の心情を表現するのは難しい。そこで、抵抗感なく楽しんで学習に取り組める言語活動として、声と簡単な身体の動きとを付け加える音読劇を取り入れた単元を構想した。

二　音読劇を取り入れる利点

・音読が大好きな子どもたちの学習意欲を高めることができる。

・内容の理解が深まる。自分の声を自分で聞きながら、文章の意味を確認できる。文字言語を音声化することにより、言葉を具体的にイメージしやすくなるので、豊かに想像を広げながら、場面の移り変わりや、登場人物の行動や言動を読み深めていくことができる。

・他者との交流ができる。読み手の解釈によって異なる表現になるため、音読劇を聞き合いながら、「自分は～と考えたので、このように読んだ」「自分なら～と考えるので、このように読む」と考えを伝え合う場を設定できる。

三　単元の構想

（一）単元名　登場人物になりきって、音読劇をしよう

（二）教材名『お手紙』アーノルド＝ローベル作（『小学生のこくご　二年』三省堂）

（三）目標

・登場人物の行動や言動から、心情の変化を想像して読む。（読むこと）

・語や文としてのまとまりや内容、響き、登場人物の心情の変化などについて考えながら、工夫して音読劇を行う。（読むこと）

（四）単元計画（全九時間）

第〇次（事前学習　読書の時間）
アーノルド＝ローベルの作品を読もう。

第一次（二時間）
学習課題を設定しよう。

第二次（四時間）
音読劇をするために『お手紙』を読もう。

第三次（三時間）
音読劇発表会をしよう。

四　授業の実際

第〇次

国語の時間ではなく、朝の読書の時間を使って、アーノルド＝ローベルの作品を担任が読み聞かせたり、子どもたち自身で読んだ

りする時間を設けた。他の作品を読むことによって、がまくんとかえるくんの関係性について、多くの情報を得ることができると考えた。

第一次

『お手紙』を読んで感想を出し合った。「がまくんがお手紙をもらえてよかった。」「かえるくんはとてもいい友達だと思う。」とがまくんとかえるくんの行動や心情を思いやる感想が殆どであった。この感想を取り上げ、二人の心情を読み取って、「がまくんとかえるくんになりきって、音読劇をしよう」という学習課題を設定した。（一、二時間目）

第二次

第三次の音読劇発表会に向けて、次のような学習をした。

物語の大体の内容が把握できるように、挿絵だけを子どもたちに与え、物語の順番に並べ替えをさせた（三時間目）。低学年の文学的な文章の読み取りには、挿絵も重要な情報の一つになるからである。

次に音読劇の背景を作るために、場面分けをした（四時間目）。時間や場所の移り変わりで場面が変わることを教え、四つの場面に分けられることを確認した。

さらに挿絵を詳細に見比べさせると（五・六時間目）、文章の前半と後半に、玄関前でお手紙を待つがまくんとかえるくんの挿絵が二枚あることが分かった。構図と描かれている二人は同じであるが、その表情が違うことが読み取れた。そこで、二人の表情の根拠となる叙述を文中から探すよう指示すると、「一の場面は、かなしい時・ふしあわせな気もちだと書かれている。」「四の場面は、とてもしあわせな気もちで、そこにすわっていましたと書かれている」という意見が出された。

登場人物になりきって音読劇をするためには、「ふしあわせ」から「しあわせ」へと心情が変化する場面の読み方が大切である。その変化を捉えさせるために、三時間目に並べ替えた挿絵を見せながら、「かえるくんが来てもずっとベッドに寝ていたがまくんが、いつの間にかかえるくんと一緒に窓の所に立って話をしている。がまくんはいつベッドから出たのかな。」と、問いかけた。すぐに答えを出させるのではなく、動作化しながら音読する時間を設定し、考えさせた。子どもたちから出た意見は次の二つである。

・「きみが。」と言ったとき。

・驚いて「きみが。」と起き上がって、「ああ。」のところでベッドからでてがまくんのところに近寄っていった。

「では、がまくんの気持ちを変えたのはどの言葉なの。」と問いかけると、全員一致で、かえるくんの「だって、ぼくがきみにお手紙だしたんだもの。」という言葉であるとの意見だった。

そこで、三人ずつのグループを作り、がまくん役・かえるくん役・地の文を読む役となって、三の場面の音読劇を練習した。どのように読めばがまくんの心情が聞き手に伝わるのか考えさせ、声の大小（大きくする場合は三重線小さい場合は一本で）や声の速さ（ゆっくりの場合は波線）や簡単な身振りを台本（教材文を拡大したもの）に書きこませた。

第三次

練習をして（七・八時間目）、音読劇発表会を行った（九時間目）。クラスで複数のグループができたので、お互いの音読劇を真剣に聞き合うことができた。

五　おわりに

「登場人物になりきって、音読劇をしよう」を最終目標にして、学習を進めてきた。単元を構想する中で、特に意識したのは、第二次の学習を音読劇というゴールに向かって充実させることだった。

今後も子どもたちの読む力を育てる授業づくりを心がけていきたい。

かんばやし　みき　千代田町立東小学校教諭。